

## (2) 【小学校】学習内容についての課題

平成28年度の小学校調査から浮かび上がった町全体の傾向から、「知識」と「活用」についての課題は次の通りである。

### 小学校の傾向

- ① 基礎的・基本的な学習事項については、これまでの取り組みによって定着に一定の成果が見られる。
- ② 基礎的・基本的な学習事項をもとに、それらの活用を考える活動が求められている。

(基礎的・基本的な知識に関する内容)

- a 設問ごとに全国と正答率を比較したとき、全国との開きは少なくなっている。(全国的に正答率の高い問題に正答している)

(既習事項を活用し、表現する内容)

- b その事柄について考えたことを、設問にあった形を選ぶ、もしくは表現することに課題がある。

## ○ 国語A

ローマ字の読み書きに課題がある。  
話の流れから、適切な説明を選択することに課題がある。

平成26年度から漢字を書くことについて課題として挙げられてきたが、今年度は「相談」という漢字を書くという設問については全国と17ポイントの開きがあるが、他の2問については昨年度より改善されている。これはこれまでの漢字を習得させる日常的な取り組みに一定の成果を見ることができる。

ローマ字については全国的にも正答率は低いが、寒川町でも同様に読み書きの正答率は5割を切っている。

また、叙述をもとに答えを選択する問題については、問題や話を読み取ることができていない。「読む」－「考える」という思考の流れが十分でないことが考えられる。

## ○ 国語B

**目的や意図に応じて内容を正しく読み取る、また、読み取った内容を適切に表現することに課題がある。**

平成26年度から「質問の意図を捉える」「内容を関係づけながら疑問を捉え、それについて自分の考えを書く」ことが課題として挙げられ、主として「記述」という部分について対応してきた。しかしながら、「書く」の前段階である「話す」「聞く」から正しい内容を選択をする、また、「読む」「捉える」から「考える」「書く」という流れができていないことが、今年度の結果から読み取ることができる。

## ○ 算数A

**四則計算のやり方や計算の結果を選択することに課題がある。  
割合や単位量を求めることに課題がある。**

平成26年度から四則計算の中でも分数の計算に課題があったが、今年度の設問に「 $(2/9) \times 3$ 」の計算については、それについては8割以上の正答率であった。今年度は四則計算において「 $\square \div 0.8$ 」のように計算結果の意味を理解している、また、「 $2.1 \div 0.7$ 」の計算の工夫の意味について理解しているか問われている設問については、正答率は低い。計算をすることはできるが、計算のやり方の根拠や式の意味について理解が十分ではない。

割合や単位量あたりの大きさを求める設問では、基準量と比較量などの関係の理解ができていない。

## ○ 算数B

**数学的な考え方について説明することに課題がある。  
数量関係について把握し、それを表現することに課題がある。**

示された条件や説明を理解し、それを用いて自分の考えを記述する設問の正答率が低い。特に図形の解釈に代表するように、数量のイメージを捉え、具体的な操作から抽象的な概念へ移行することが難しく、直近3年では「何を」「どのように」という見通しを持つことが難しい傾向にある。今年度の設問では、示された除法の式を並べてできた形と関連づけ角の大きさをもとに、式の意味の説明を記述する設問については、全国との開きはないものの、正答率は5%に満たない状態である。

### (3) 【小学校】学習についての改善点

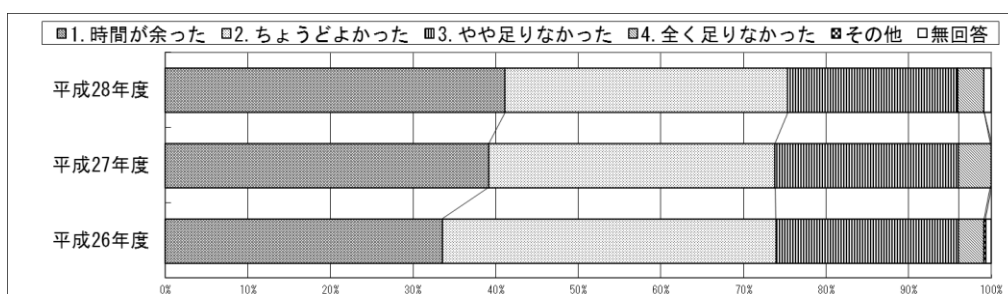
「知識」と「活用」については先述したとおりであるが、学習内容とともに学力の向上を図る上で考えなくてはならないのは、児童の関心・意欲・態度である。この上に学力が積み上げられるので、無回答率や回答時間については学習への向き合い方について指標となる。

#### 無解答率と「解答時間は十分だったか」の経年変化

無回答率 (%)

国語A	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	14.9	4.8	8.1	6.7
全国との差	( 4.2 )	( 2.5 )	( 4.5 )	( 1.4 )
全国	10.7	2.3	3.6	5.3

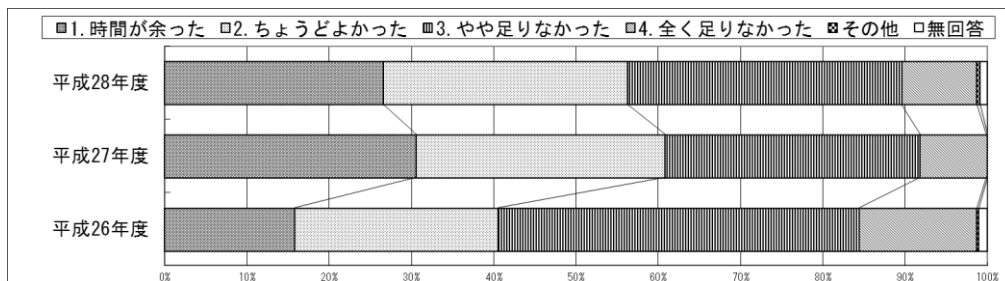
「解答時間は十分だったか」



無回答率 (%)

国語B	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	18.9	12.7	10.0	6.1
全国との差	( 5.3 )	( 3.5 )	( 3.9 )	( 1.5 )
全国	13.6	9.2	6.1	4.6

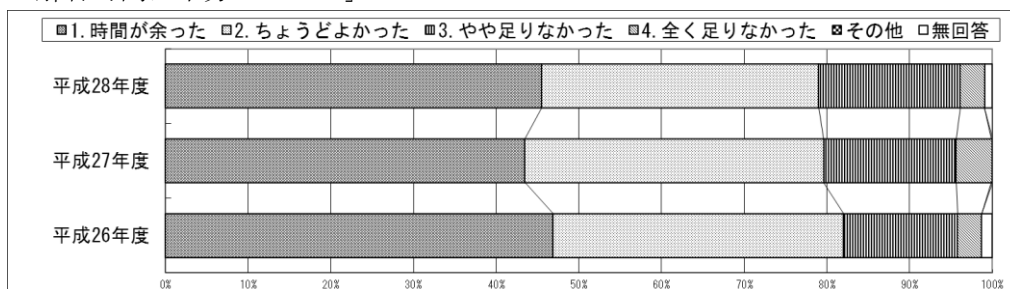
「解答時間は十分だったか」



無回答率 (%)

算数A	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	2.0	1.3	3.3	2.0
全国との差	( 0.3 )	( 0.4 )	( 1.5 )	( 0.2 )
全国	1.7	0.9	1.8	1.8

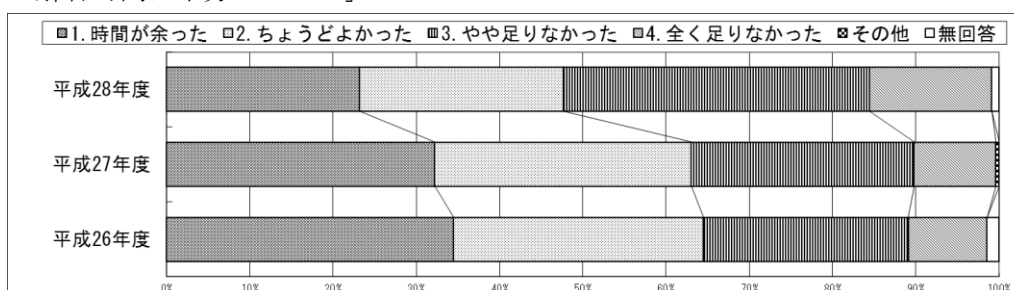
「解答時間は十分だったか」



無回答率 (%)

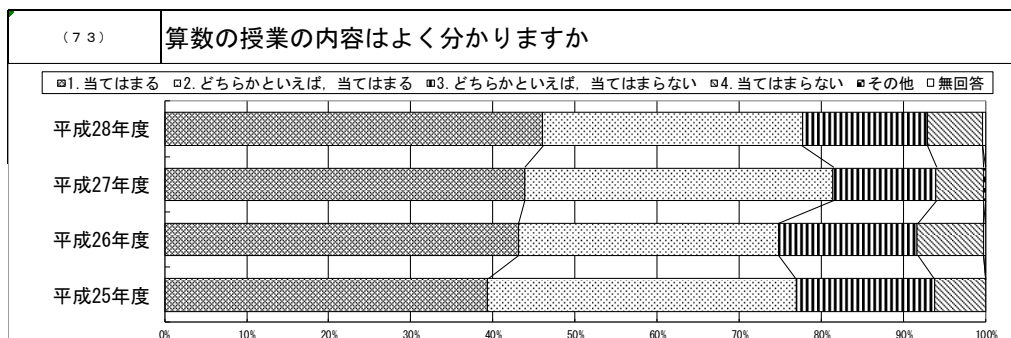
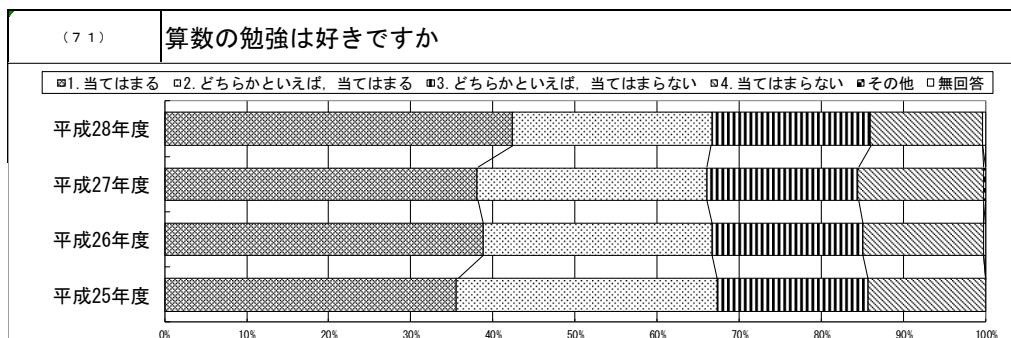
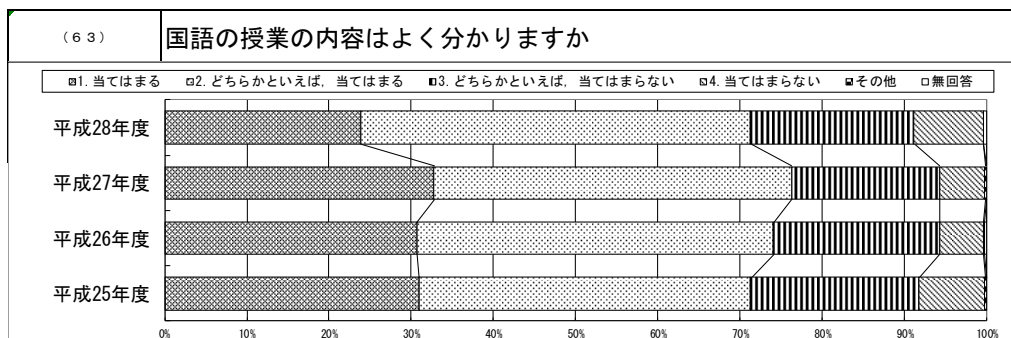
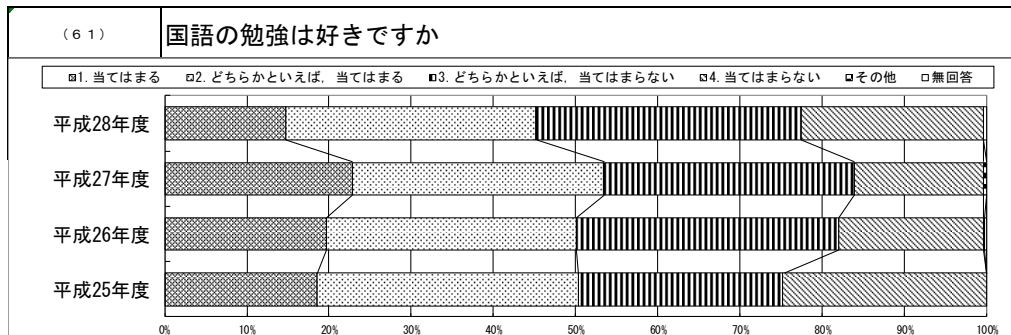
算数B	25年度	26年度	27年度	28年度
寒川町	8.8	8.1	13.5	9.2
全国との差	( 2.5 )	( 3.8 )	( 4.4 )	( 1.8 )
全国	6.3	4.3	9.1	7.4

「解答時間は十分だったか」

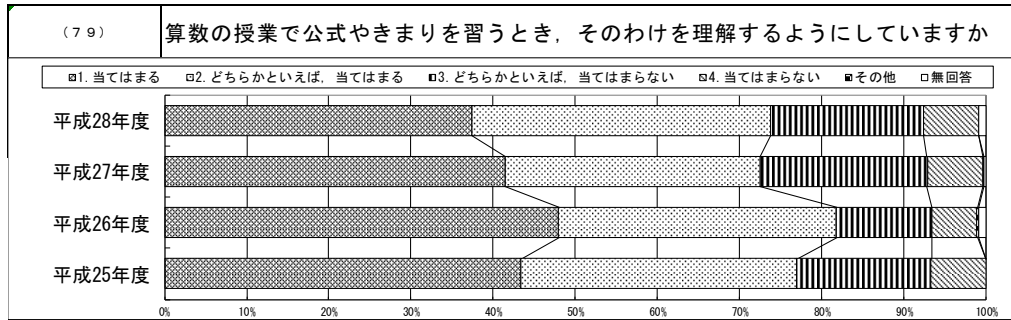
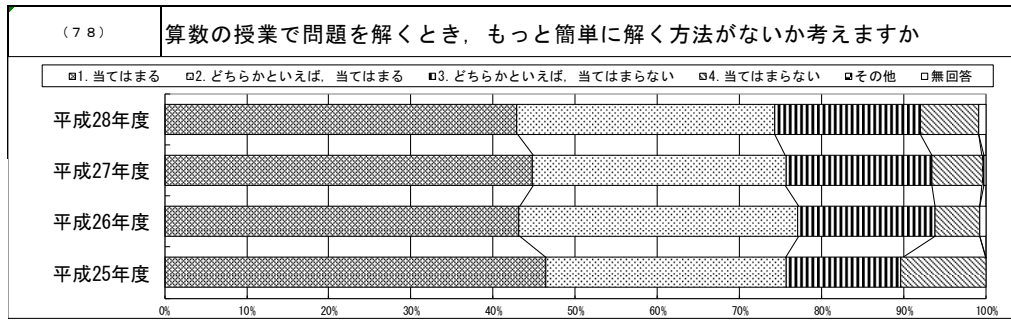
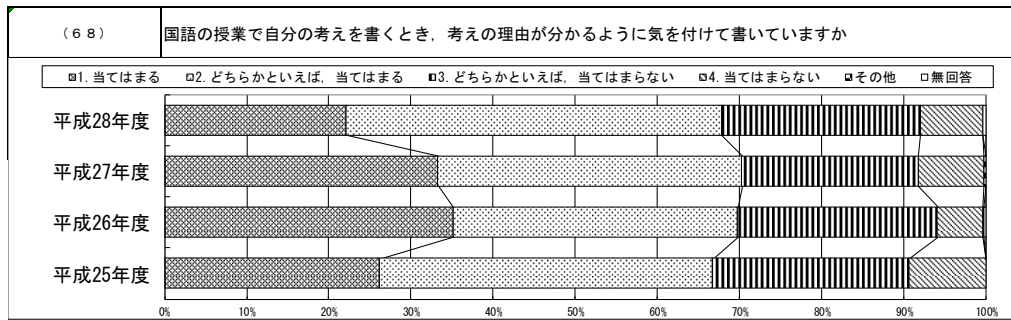
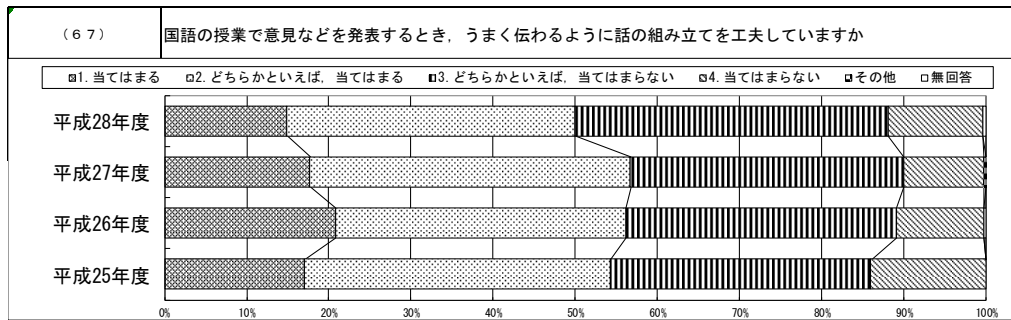
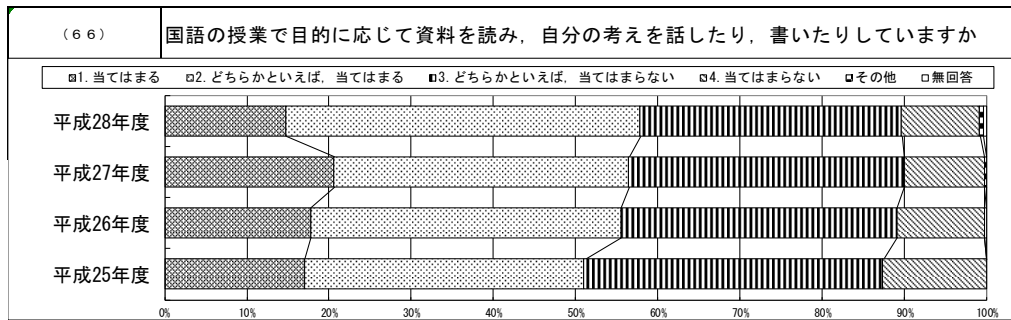


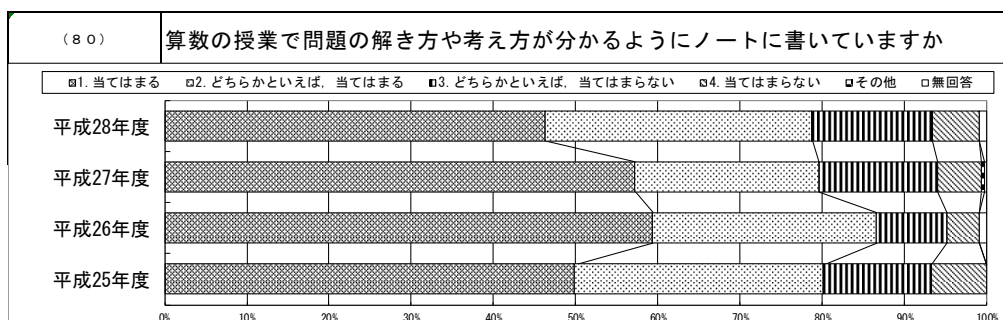
無回答率と児童質問紙「解答時間は十分だったか」において、主として「知識」に関する問題については、無回答率は下がり、解答時間についても十分であることから、小学校の傾向①にあるように基礎的・基本的な内容についての習得が児童の行動面からも向上していることが分かる。また、小学校の傾向②についても、主として「活用」に関する問題について、無回答率が減少し、解答時間が足りないということから、取り組む意欲はあるものの、学習事項の「何を」「どのように」活用していくかという部分に課題が残る。

また、それぞれの教科についても質問紙の経年変化から学習についての意識を見取ることができる。



国語、算数ともに授業の内容はよく分かるという結果であり、基礎的・基本的な内容については、児童自身についても一定の成果を感じていることが分かる。しかし、その一方で教科の学習全般を見ると「好きである」と回答する児童は少ない傾向である。このことについて、次の質問から授業の実情が分かる。





これらのことから、「話す」「書く」「考える」「説明する」という活動が授業内で行われており、以前から課題に挙げられてきた「書くこと」についても日常的に取り組みがなされていることが分かる。しかし、「活用」に関する調査結果では十分に成果が出ていないことから、児童の自己評価としては、先述した「好きである」というまでには至っていない現状がある。学習に対して「できる」「やってよかった」という感覚をより多く経験させることが必要である。

以上のことから、今後の改善の方向性については次の通りである。

### 小学校 改善の方向性

- ア 基礎的・基本的な学習事項については、継続して習得・習熟を目指して取り組んでいく。
- イ 考える・活用する学習については、考えるもとになる事項、その使い方について、実践の中で実感できるようにする。